

1. 令和4年産水稻 2. 田植までに行う作業

1) 塩水選から播種までの作業 ~丈夫な苗は充実した種子から~

(1) 塩水選 ※沈んだ粃=出芽しやすく生育の良い苗の元！

(参考) 塩水選の比重及び塩の使用量

米の種類	比重	使用量 (kg) / 水20L	
		食塩	硫酸
うるち (粳)	1.13	4.0	5.8
もち (糯)	1.08	2.4	3.2

①米の種類に応じ、左表を参考に比重を調整 (食塩または硫酸の使用量に注意)

②沈んだ粃に塩分が残ると発芽不良となるため、十分水洗いした上で種子消毒

(2) 種子消毒 ※苗いもち等の、育苗中の病害発生を防ぐ重要な作業です！

慣行：殺虫剤及び殺菌剤を溶かした水に24時間浸漬 (薬剤は栽培暦を参照)

温湯：温湯処理機の取扱説明書に従い浸漬

注意 慣行は農薬ラベル確認、温湯は処理時間・温度・浸漬する粃の量を厳守！

(3) 浸種・催芽 ※出芽の良否が決まるため慎重に！

①水槽の中身は「水>粃」

(粃が多過ぎると酸欠で発芽不良の原因となります！)

②種粃は網袋の7割程度が上限

(袋の中で粃が動き、水と十分接触するように！)

③浸種する水は水道水等「飲める水」を使用

(雑菌等による障害防止！)

④水は毎日交換、交換するときは網袋を引上げ作業

(掛け流し交換は消毒効果を損ねるので×！)

⑤浸種日数=100℃÷水温 (10℃を下回らない様)

(水温上昇を防ぐため、直射日光の当たらない場所で浸種しましょう！)

⑥鳩胸状態 (図1の様な状態) となったら催芽は完了

(芽を伸ばし過ぎないように、粃の状態を毎日確認しましょう！)

(4) 播種 稚苗、中・成苗等の育苗様式に合わせ適切に ※箱苗防除も同時に可能
ポイント

- ・品質を維持するため、種子は毎年新たに購入したものを使用しましょう。
- ・種子消毒及び浸種・催芽を適切に行い、育苗期間中の病害を防ぎましょう。
- ・播種時の箱苗防除については、**昨年の病虫害発生を踏まえ判断しましょう。**



図1 鳩胸状態の粃

2) 育苗期間中の管理 ~田植後の生育は、苗の出来・不出来で決まります！~

(1) 温度管理 ※生育に応じた適温を保ち、ムレ苗・徒長苗・病気発生を防止！

苗の生育に応じた適温

①出芽期

(幼芽長=出芽後の苗長が0.5~1cmの頃)

30~32℃に保つ。

②緑化期

(苗長が3~4cmの頃)

22~25℃に保つ。

※夜温が10℃以下となる場合は保温！

③硬化期

(苗が緑色となった頃)

基本的に屋外で、保温せず図2の状態まで育成

※気温が12℃以下となる場合は保温！

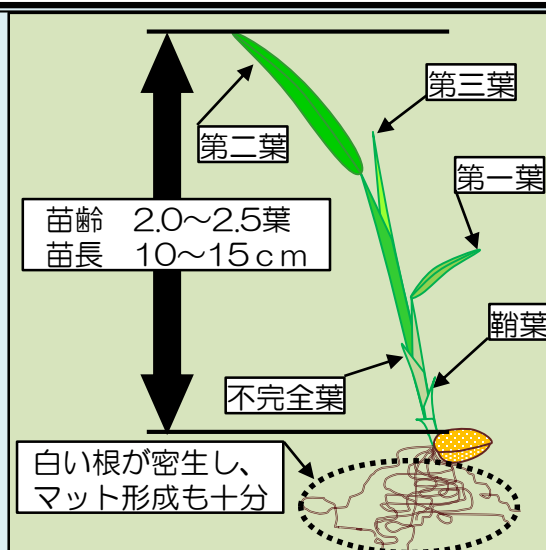


図2 適切に育成された苗

裏面

(2) 水管理 ※灌水は日中2回が基本！

- ①育苗中の灌水は、日中の気温が高くなる時間帯（図3参考）に
午前1回（午前10時頃まで）
午後1回（午後2時頃）
の計2回行うことが基本です。

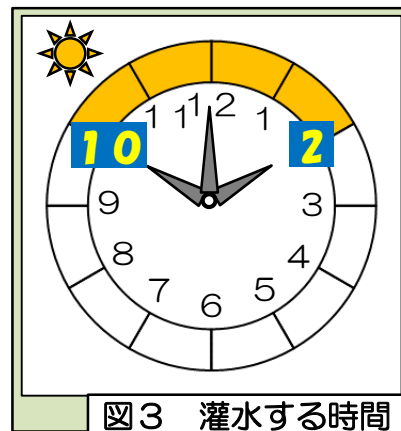


図3 灌水する時間

※平坦地では、晴天の日にはこの時間内にもう1回灌水した方が良い場合があります。

- ②夕方以降は基本的には灌水しませんが、気温が高く床土が乾き気味で、葉が巻き始めている場合は床土が湿る程度に軽く灌水しましょう。

(3) 病害防除・生理障害防止 ※昨年発生した場合は要注意！

- ①苗の生育段階に関わらず、気温の高い日は
トンネル育苗：トンネルの前後を開放し、外気を入れる
べたがけ育苗：苗にかぶせた資材を外し、外気にさらす
等により苗箱の温度・湿度を適切に保ちましょう。

※苗の病害・生理障害は、気温・湿度の急激な変化により発生しやすくなります。育苗期間中の気温の日較差が大きい場合は特に注意しましょう。

また苗にかぶせた資材の一部が凹むと、苗と資材が密着しムレ苗・焼け苗の原因となります。資材をかぶせるときは十分伸ばして張り、水たまり等による凹みが生じた場合は速やかに張りを直しましょう。

- ②苗の生育を確認し、床土表面や根のカビ発生・苗本体の萎れ等を見たら速やかに殺菌剤を散布しましょう。

※薬剤の使用時期が短いので、初発を見逃さないよう注意しましょう。

(参考) 苗立枯病防除に用いる薬剤

薬剤名	原因となる菌のカビの色、症状				使用上の注意	
	ピシウム 枯れ症状のみ	トリコデルマ 緑色	リゾープス 白色	フザリウム 白又は赤色	使用時期	回数
ダコニール1000			○		播種時から緑化期 但し播種14日後まで	2回以内
ダコレート水和剤		○	○	○		
タチガレン液剤	○			○	播種時及び発芽後	1回のみ
タチガレファイト液剤	○			○		
タチガレエースM液剤	○			○	播種時または発芽後	1回のみ

注意 ①希釈倍率及び使用量/苗箱について農薬ラベルを確認し、適切に使用すること
②微生物農薬で種子消毒を行った場合は、温度・湿度管理の徹底により発生防止

ポイント

- ・育苗期間中の温度・湿度・水分を適切に管理し、病害や生理障害を防ぎ丈夫な苗を育成しましょう。

3) スクミリングガイ対策 ~田植までに貝を減らすことが肝心~

(1) 入水前の駆除 ※寒さで動き回れない時期が適期！

- ①圃場：田面を耕起することにより作土中の貝を粉碎し、かつ外気にさらす。

耕起するときの速度

ロータリーの回転速度は高速 > トラクターの前進速度は低速

- ②水路：底等に溜まった泥をさらい、貝を外気にさらす。

※いない圃場に広げないよう、作業後の水洗い・貝の処分を徹底しましょう！

(2) 圃場への侵入防止 ※流れ込む、入り込む貝を徹底駆除！

- ①圃場：水口及び水尻にネット袋等を設置する。

※網目は6~9mmが適正です。また詰まった貝は潰す等により処分しましょう！

- ②水路：壁に産み付けられている卵の塊を処分する。

※卵1個潰すことにより、約3000頭減らせます！

ポイント

- ・根絶はすぐにはできません。貝を減らすことが被害を減らす上で有効です。

・椿油等による駆除は違法です。登録済薬剤を使用しましょう。

お問い合わせ先：電話097-506-5791

ホームページ：http://www.pref.oita.jp/soshiki/11604/saibaikanrizeyouhou.html